三宅義子さんの思い出

追悼　三宅義子さん

藤目ゆき

三宅義子さんは、2014年6月26日午後11時19分、宇部医療センター緩和ケア病棟で永眠された。私に訃報を知らせてくださったのは、義子さんの友人であり「お弟子さん」でもある藤井郁子さんであった。友人や近親者は誰も臨終に立ち会うことができなかったとのことである。かねてからご病気だと知らされていたので、訃報が届く日が来ることをわかっていなかったわけではない。それでも、その日はできるだけ遠い先であってほしかった。

今年、アジア現代女性史研究会は創立から11年目を迎え、年報『アジア現代女性史』の本号は第10号ということになる。創立メンバーの一人だったミリアム・シルバーバーグが死去したのは2007年3月のことだった。『アジア現代女性史』第5号をミリアム・シルバーバーグ記念号として発行することができたのは、三宅義子さんの提案の賜であった。アジア現代女性史研究会は義子さんの存在に力づけられて、何とかその後も活動を続けてくることができた。ところが、その義子さんがこんなに早く他界してしまわれた。喪失感は大きく、とても言葉にならない。

藤井郁子さんと相談して、本号は三宅義子さん追悼特集を編んだ。ノーマ・フィールドさん、堀場清子さん、纐纈厚さん、板橋めぐみさんは、義子さんの思い出を寄稿してくださった。ブッチ・ポンガスさんには特別に、沖縄におけるフィリピン人女性のレイプ被害と闘いに関連して報告文を書き下ろしていただいた。ブッチさんは義子さんが代表をつとめた科研のプロジェクト「基地と岩国市民」の取り組みとして行った2008年の沖縄調査旅行に同行された方だ。

藤井郁子さんは、山口県立大学に提出された修士論文を推敲して本号に寄稿している。三宅義子さんがこの修士論文の主査をつとめた。義子さんの遺品の中に、藤井郁子さんの草稿に赤で書き込みをいれたものが残されていたそうだ。

私自身は、編集に責任を負う者として、三宅義子さんの生涯と業績をきちんと紹介する文章を書かねばならない、と当初は考えた。が、著作リストを作成したり、それまで読めないでいた著作を集めて読み進めたりしているうちに、いかに義子さんが私たちの女性史研究にとってかけがえのない人であったかを実感するとともに、私に－少なくとも今現在の私に－書けるのは、「私にとっての三宅義子さん」についてでしかないことに思い至った。「こんなことも書いておられたのか」、「こんな活動もしておられたのか」と驚いたり、感動したりしながら遺作を読むうちに、もっと義子さんと語り合い、いっしょに仕事をしたかったという寂しさや悲しみも深くなる。活字を通して義子さんに再会できるのは大きな喜びだが、あの颯爽とした三宅さんともう語り合うことができず、知的刺激に満ちた発言－ときには毒舌も－を聞くことはできなくなったのだから。今はただ、友人たちとともに義子さんの死を悼み、感謝をこめて著作リストを紹介し、「私にとっての三宅義子さん」を

追懐するばかりだ。

1．尾道

私が初めて三宅義子さんの存在を知ったのは1985年か86年の頃、修士課程の大学院生だった頃だ。私の当時の関心の焦点は、1920年代に尾道の名士であった三宅要次郎氏の後援を得てスラム状態だった漁村に住み着いて社会事業を展開した柴原ウラ（柴原浦子：1887～1955 年）という女性にあった。柴原ウラは、やがてバース・コントロールの唱道者として全国的に有名になり、昭和恐慌のただ中に大阪へと移住する。15年戦争下には非合法に活動する共産党員を支援したり、貧しい女性たちを助けて非合法の妊娠中絶介助をも辞さなかったため、何度も逮捕されている。1985～1986 年頃にはまだ婦人民主クラブの松本員枝さんをはじめとして大阪で柴原ウラといっしょに運動をした女性たちがお元気だった。また、尾道でも、柴原ウラのことを鮮やかに記憶している高齢者が地域にたくさん健在だった。

尾道時代の柴原ウラについて知りたいと願い、部落解放同盟広島県連合会の事務局長だった石岡隆允さんや地元の新聞社の協力をいただいて、尾道で柴原ウラを覚えている人を探していたところ、三宅要次郎さんの子孫にあたる三宅三郎さんや敬一さんにお会いすることができた。三郎さんや敬一さんに柴原ウラと三宅要次郎さんの思い出を聞かせていただくうちに、自然と話に出たのが三宅義子さんのことだった。

三郎さんや敬一さんが「女性学」と表現されたかどうかは思い出せない。多分そうはおっしゃらなかっただろう。何か、親戚の中にも柴原ウラに興味をもっている女性がいる、というようなお話だった。義子さんが渡米中のことで、すぐに連絡はとれそうになかった。こういうふうに、私は義子さんの存在をまずもって「三宅要次郎さんの子孫」として知ったのである。

尾道在住のご親戚から伺った「三宅義子」という名前を頼りに文献を探し、出会ったのが「溝上泰子さんに聞く 人間の根は家族のなかでつちかわれる」(『季刊女子教育もんだい』11、1982 年 6 月）という義子さんによるインタビュー記事だった。これが、私が初めて読んだ三宅さんの著作になる。

溝上泰子さん（1903年11月11日～1990年10月11日）は、柴原ウラと同郷の広島県御調郡出身で、柴原ウラの学費援助を得て奈良女高師に進学し、やがて「戦後女性として初めて島根大学で教育学の教鞭をとった研究者」となった。『日本の底辺－山陰農村婦人の生活』(1958年)、『変貌する底辺』(1966年)、『受難島の人々－日本の縮図・沖縄』(1959年）などを通じて、「今まで声にならなかった日本の生活者の生きる姿を探求することで、民族の未来の可能性の問題を世に問うた人」（三宅義子）である。

義子さんはこのインタビュー記事で、次のように書いている。

> 私が溝上泰子という人物に興味をもったのは、『わたしの歴史－絵と文』(一九七三年、未来社刊)を読んでからである。その絵は見ているだけでなんともいえず楽しかった。一人の少女を中心にして展開される明治から大正にかけての日本の農民家族の生活－そこから伝わってくるものは、何かしら執拗な「生活とは何か」「人間とは？女とは？」という問いかけのようなものだった。それから私は折りにふれて溝上さ

んのかかれたものを読むようになったのだが、溝上さんの読者は、その著作に教育学の研究成果を求めるというより、私のように生活探求者溝上泰子の探求の跡を期待して近づく人が多かったのではないか。

その溝上泰子さんは、自分自身が「女とは何か、母とは何か」を考えるようになったのには、「九人の子どもを生んだ私の母の生き方」の影響とともに、柴原ウラとの出会いの影響が大きかったことを義子さんとの対談の中で語っている。

私はすっかり嬉しくなり、大急ぎで『わたしの歴史ー絵と文』を入手し、溝上さんの他の著作をも次々に読み、東京のお住まいにおしかけて、柴原ウラのこと、溝上さん自身のことをいろいろ聞かせていただいた。初対面の溝上さんは、まるで「女の岡本太郎」といった印象だった。岡本太郎氏の「芸術は爆発だ」という言葉は有名だが、溝上さんの語りの迫力は正にそういう「爆発」的な感じで、私はすっかり圧倒され、大いに心を動かされたものだった。

私は柴原ウラに関する調査をまとめて修士論文を書き、博士課程に進学した。その調査成果は『日本史研究』366号（1993年2月）に「柴原浦子ーある産婆の軌跡」と題して発表した。また、後に山川菊栄賞を受賞した『性の歴史学』にも柴原ウラのことを書いた。大学院生の時期に柴原ウラの調査を通して尾道の人々や溝上さんとの幸せな出会いがあり、女性史を探求する楽しさを知ったからこそ、私は女性史研究の道を進んでくることができた。その当時はまだ三宅義子さんにお目にかかったことはなかったけれども、義子さんが同郷の柴原ウラや溝上泰子さんに興味をひかれ、「生活とは何か」「人間とは？女とは？」の問いを探求し、溝上さんのインタビューを公にしてくれていたことに直接・間接の恩恵を被っている。

義子さんと知り合った後に、こんな私の思い出話を感謝の気持ちをこめて話したことはあったかと思う。が、いつでも他の話題が色々あったので、尾道について心ゆくまで語り合ったことがなかったことは悔やまれる。

三宅要次郎氏や柴原ウラ・溝上泰子さんに関連する話題だけでなく、義子さんがまだ子どもだった1950年代、尾道のお宅に警察がふみこんできて恐ろしかったという話をしてくださったことがあった。朝鮮戦争前後の激しい左翼弾圧の一環だったのだろうか。三宅要次郎氏は地域の社会事業の拠点として尾崎クラブを創設した中心人物で、考え方がすこぶる進歩的で、そこに住み込む活動者として柴原ウラを抜擢し後援したのだが、その尾崎クラブで火災があったとき、人がみな我と我が子の身をかばうので必死でパニック状態になっている最中、他家の子どもたちを救うのに献身したという、責任感と気骨のある人物だった。義子さんの御父上は、そんな要次郎氏の気質を受け継がれたのだろうか、ファシズムと戦争の時代には左翼運動に傾倒し、治安維持法で逮捕されたこともあった。戦後には、共産党から選挙に立候補されたとも聞く。

三宅義子さんは1950年代のマッカーシズムに強い関心を持ち続けられていたが、その関心の根にはそんな家族的バックグラウンドもあったということであろう。義子さんのインタビュー記事の表題を借りていえば、尾道時代に義子さんが家族のなかでつちかわれた「人間の根」があったことは間違いないだろう。そんな話もいつかきちんとお聞きしたいと思っていたのに、果たせなかった。

あれはいつだったか、私が昔尾道で食べた魚が新鮮でこれまで食べたどの魚よりおいしかったと言うと、そうなのよ！　と、我が意を得たとばかりに満面に笑みを浮かべられていた。「三宅義子さんと尾道」は、私の心のなかで今もとぎれなくつながっている。

（溝上泰子さん：「溝上泰子さんに聞く」より）

（柴原ウラ：『性の歴史学』より）

2．社会主義フェミニズム

三宅義子さんが最初に出版した図書は、大原紀美子さんと共訳の、『性の神話』（柘植書房、1974年）という翻訳書だったようだ。原著者であるエブリン・リードは「マルクス主義の立場から女性解放の理論的諸問題に取り組む一方、1968年以後のアメリカ反堕胎法闘争の先頭に立つ活動家でもあり、全米女性堕胎行動連合（WONAAC）の創立者の一人」（『性の神話』の著者略歴より）で、『性の神話』にはエブリン・リードが『インターナショナル・ソーシャリスト・レビュー』などに発表した文章が収録されている。私は、卒論も修論もバース・コントロールを主題にし、博士論文でも堕胎罪体制を論じたというのにかっこうの悪い話だが、この本のことを今回義子さんの著作リストを作ってみて初めて知った。

三宅義子さんは、女性解放の不可欠な要素としてのリプロダクティブ・ライツへの関心を一貫して持ち続けていたのだろう。そんな義子さんが、柴原ウラへの特別な興味をもっていたのも腑に落ちることである。尾道で三宅一族と家族ぐるみのおつきあいでもあったという柴原ウラに興味がわくのは自然だが、それだけではない。なんといっても柴原ウラ

は堕胎罪や治安維持法をものともせず女性たちの中絶を助け、非合法共産党員を助けもしたリプロダクティブ・ライツの闘士であり草の根の社会主義者だったのだから。

三宅義子さんは 1977 年にはシーラ・ローバトムの『女の意識・男の世界』(1977 年)の邦訳を出版している。ローバトムは、「1960 年代初めから社会主義運動に参加し、1960 年代後半には、当時始まったばかりの女性解放運動でも活躍するようになった。社会主義、フェミニズム、歴史とを結合させた著書を多数書き、多くの人々に読まれている」(『フェミニスト事典』明石書店、1991 年) という英国のフェミニストで、「社会主義フェミニズム」の代表的な理論家である。『女性の意識、男性の世界』の原著は 1973 年に出た。ローバトムの多数の著作の中で早い時期の作品である。日本の大学にもローバトムの図書は数十種類の原著が所蔵されているが、日本語では 1977 年の義子さんの翻訳書『女性の意識、男性の世界』と、それから 10 年以上たって刊行された『断片を超えて：フェミニズムと社会主義』(ヒラリー・ウェインライト、リン・シーガルとの共著、澤田美沙子 [ほか] 訳、勁草書房、1989 年) の 2 件だけである。義子さんは、ローバトムの社会主義フェミニズムを日本に紹介する先駆的な役割を果たしたわけである。

義子さんはその翌年、次のような文章を綴り、学生時代の経験やローバトムの翻訳にこめた思いについて、こう書いている。

> 私は、それまでアメリカのウィメンズ・リブの理論書にあきたらないものを感じていた。それらは、規模の大小はあったとはいえ、日本でも戦後の女総体が置かれた状況そのものの中から、やはり七十年前後に、(戦後) 第二波女性解放運動として起る必然性のあった女たちの運動を外から鼓舞したことは事実である。私自身の場合をとってみても、女性解放は社会主義になれば (つまり、階級矛盾を止揚すれば)、必然的に達成されるという思想的雰囲気の最後の残滓の中で学生時代を送り、改めて女性解放というテーマを選び直したのであるが、それらの理論書は、この問題意識に一定の確信を与えてくれた。
>
> しかし、だからといって、『歴史を通して第一義的矛盾は、男による女の支配である』という歴史観に収斂してゆくアメリカのラディカル・フェミズムの考えに直ちにくみするわけにはゆかなかった。階級闘争との関連はどうなってるのかと、私は考えつづけていた。
>
> そんな私自身の問題関心に答えてくれたのが、ローバトムの著作だった。彼女の理論活動は、イギリスの労働運動の伝統と隣接したところではぐくまれたことを知るにつけ、アメリカで典型的に理論化されたラディカル・フェミニズムをも、「アメリカという土壌の中で生れた」という形容詞をつけて、相対化する視点を与えられたように思えた。それと同時に、私は日本の女として、自分の立っている足下をみきわめるということにこだわりだしたのである」
>
> (「姿見にうつして」『女性史研究 』 第 6 集、1978 年 6 月 1 日)

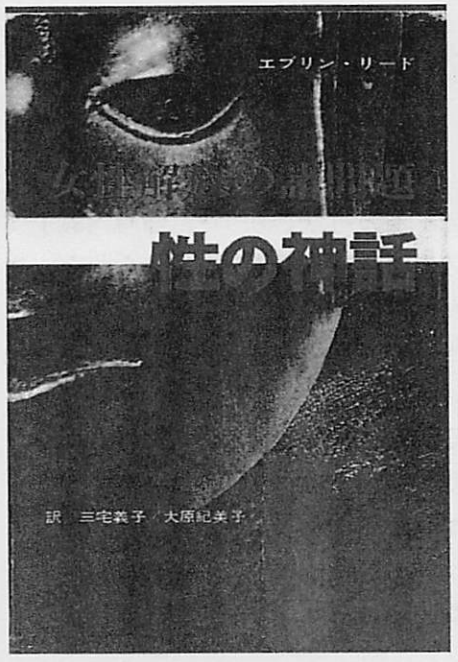
「女性解放は社会主義になれば (つまり、階級矛盾を止揚すれば)、必然的に達成されるという思想的雰囲気の最後の残滓」の中で学生時代を送った、と三宅義子さんは書いている。学生運動のどの潮流であっても、義子さんと同世代の女性たちの多くが共通した感覚

を抱き、その違和感の中からウィメンズ・リブが生まれ、新しい女性解放理論の模索が始まっていったことはよく知られている。

とはいえ、義子さんと15歳の年齢差がある私が学生だった1980年代には、マルクス主義はもはやおおむね化石扱いであった。マルクス主義を標榜する人口の絶対数が減っているだけに、「女性解放は社会主義になれば（つまり、階級矛盾を止揚すれば）、必然的に達成されるという思想」を標榜する人もあまり見かけなかった。むしろ、マルクス主義をそのようなものとのみ描いて冷笑し排斥する雰囲気こそが主流になっていたような気がする。だから私は、三宅さんのこの一文に限って言えば、自分よりも一世代、二世代前の女性たちの苦闘に思いを馳せてみるものの、それ以上の共感はないし、この一文だけであれば、ウィメンズ・リブのどこにでもある「決まり文句」のようなものとして読み流してしまったかもしれない。

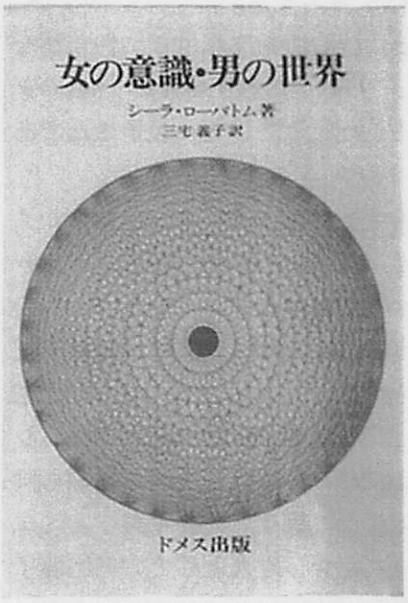
だから私が惹きつけられてきたのは、「しかし、だからといって」から後の内容である。ウィメンズ・リブ世代の一人というだけでなく、アメリカのフェミニズムに飽き足らず、「階級闘争との関連はどうなってるのか」と考えつづけていた義子さん、ローバトムの「イギリスの労働運動の伝統と隣接したところではぐくまれた」理論活動に注目し、性差別を階級差別・人種差別との関連で把握するローバトムの視点に共感した義子さん、「日本の女として、自分のたっている足下をみきわめるということにこだわりだした」義子さんであった。

私自身は、ローバトムのステラ・ブラウン（英国の労働党員でバース・コントロール活動家）に関する著述に感銘を受け、博士論文に取り組んでいた1990年代の初め頃にローバトムのいくつかの著作から学ぶところがあった。当時は三宅義子さんを「ローバトムを訳した三宅義子さん」としてそう強く意識していたわけではない。それでも性・階級・民族を統一的に把握することのできるフェミニズムの理論を希求していた私は、確かに三宅義子さんが訳したローバトムの著作から学ぶことができた。三宅義子編集・翻訳『リベレーション ナウ　―　アメリカ女性解放運動の主張』（柘植書房、1976年）を読んだのも同じ時期のことだったように思う。社会主義フェミニズムを先駆的に日本に紹介した人としての三宅義子さんをはっきり意識するようになったのは、2000年代になって義子さんと共に仕事をする幸福に恵まれるようになってからのことである。



『性の神話』表紙

『リベレーションナウ！』表紙



（『女の意識・男の世界』表紙）

3．岩国

三宅義子さんに初めてお目にかかったのは、2001 年 8 月の初めであった。当時、義子さんは山口県立大学の教授であり、学生サークル・ユネスコクラブの顧問をしておられた。義子さんの研究室によく出入りしていた板橋めぐみさんたちから、学生たちの合宿で私に女性問題に関して講演するようにと依頼があり、私は当時の大阪外国語大学の学生といっしょに山口県立大学を訪れた。そして、何も事前に連絡をしていなかったのだが、いそいそと義子さんの研究室を探し、ドアをたたいたのである。義子さんは驚かれたと思うが、歓迎してくださった。初対面だったけれども、昔から親しくしてきた人に会ったような心持ちで楽しいひとときを過ごした。私の心の中では修論時代から 15 年近いおつきあいがある義子さんだったし、実は前年 2000 年 5 月には義子さんが編集する『日本社会とジェンダー』（明石書店）に拙稿「冷戦体制形成期の女性運動――占領下の日本民主婦人協議会

と朝鮮戦争」を寄稿し、手紙などで連絡をとりあってはいたのである。義子さんと研究室で話をしてから、構内を駐車場までいっしょに歩いたような気がする。編集中の『日本社会とジェンダー』のこと（出版にこぎつけたのは 2002 年）や学生たちの岩国基地周辺のフィールドワーク活動のことなど色々な話をした。義子さんの率直で自由闊達な語り口は魅力にあふれていた。

それからのおつきあいの中で、義子さんは私にとってかけがえのない「イワクニトモダチ」になった。義子さんに初めてお目にかかった翌日だったろうか、板橋めぐみさんが運転する車に同乗させてもらい、学生たちといっしょに岩国に初めてフィールドワークに行った。義子さんは纐纈厚さんたちと山口市で反戦平和・憲法擁護の市民運動を展開しておられた。私は 2004 年 2 月 11 日の「第 38 回思想と信教の自由を守る山口県民集会」に招いて頂き、「日米韓軍事同盟と女性の人権」と題して、岩国基地周辺で頻発した女性レイプ・殺人事件に関する講演をしたこともあった。その講演がきっかけとなり、私はそれまで活字を通してしか存じ上げなかった堀場清子さんとのご縁を得ることができた。義子さんが堀場さんに講演の内容を紹介してくださり、堀場さんが米軍基地周辺の歓楽街で働く女性たちの受難をテーマに「人権」と題する詩を創作し、『詩と思想』（2005 年 6 月）に発表してくださったのである。

このように早くから岩国基地を見つめていた三宅義子さんだが、義子さんが頻繁に岩国通いを始めたきっかけは、2006 年 3 月の岩国市における住民投票であった。米軍再編計画の一つとして厚木から艦載機が移転する計画をめぐる住民投票において、岩国市民は基地機能拡大に対して鮮やかにノーの意思表示をした。この岩国住民投票を成功に導いた原動力としての女性たちの行動はマスコミなどを通じても広く伝えられ、注目されていた。義子さんは後に書かれた報告文において、当時の心情について、「ぜひ当事者に会って、彼女らがなぜそのような行動に起ち上がったのか、そもそも一人ひとりの女たちが生きてきた女の人生、女の経験がどこでどのように反基地意識をはぐくんでいったのか、その意識の回路を知りたい」（『基地と岩国市民』73 頁）と思い、そこから岩国に足繁く通うようになったと回顧している。

基地周辺の女性史、とくに岩国基地をめぐる女性史に特別なこだわりがあった私にとって、義子さんの岩国調査は百万の援軍を得たようなもので、心から励まされた。助けていただいたことも数え切れない。田村順玄さん（岩国市会議員）にじっくりお話を聴く最初のチャンスも、義子さんが与えてくださった。岩国出身の作家宇野千代の生家をいっしょに見学したこともあった。義子さんと大川清牧師の教会を訪ねたり、その近くにある半月庵を訪れたことも懐かしい。2007 年 11 月 25 日、岩国国際集会で「基地と女性」をテーマにワークショップを開いたときは、義子さんがコーディネーターを引き受けてくださった。さらに「基地と岩国市民」の科研（2008～2009 年度）が採択されてからは、義子さんが企画した岩内健作先生（元岩国教会牧師）のお話を聴く集いに寄せていただいたり、二人で三木恵美子さん（岩国出身の弁護士）に会いに横浜まで行ったりした。

2008 年夏の沖縄への旅も忘れられない。この旅には藤井郁子さん、板橋めぐみさん、ブッチ・ポンガスさんとアガリン・サラ長瀬さんやロサナ・タピルさんたち在日フィリピン人活動者たちも参加した。共に読谷村や辺野古や高江を訪ね、読谷村の知花昌一さんや大宮育雄さん、ヘリ基地反対協議会の安次富浩さんや名護市市議の川野純治さんと懇談する

機会を得た。また那覇市久茂地にある、女性が集い、語り合う空間「すぺーす・結」を訪問し、高里鈴代さんや浦崎成子さんにお会いすることもできた。このような調査旅行が実現できたのは、義子さんが沖縄に特別な思いがあり、しかも後進の研究者や活動者が基地問題に取り組むことを支えようとするあたたかい気持ちをもっておられたからだった。

岩国基地問題へのアプローチについて、私は女性史・現代史の実証研究で通してきたが、義子さんは史実の掘り起こしを尊重しつつも、フェミニズム理論の呈示をとても重視しておられた。よくシンシア・エンロー（米国の政治学者）の名を挙げられていた。エンローは、それぞれの社会、文化の中で機能している「男らしさ」、「女らしさ」というジェンダー規範は軍事主義と絡み合いながら人々の意識の中に織り込まれ、それが社会全体の軍事化を支え、進行させていることを指摘していた。義子さんは、エンローの軍事主義とジェンダーの関連性に関する問題提起が、従来支配的であった「女＝平和を守る者」「男＝戦争愛好者」というような本質論的二分法や戦争を「覇権的男性主義」の必然的結果と見なすような傾向から脱却する手がかりになるものとして高く評価していた。

義子さんが岩国調査の中で特にこだわっていた理論問題の一つが、フェミニズム界の重大な争点である「女性兵士問題」と男女共同参画行政である。米国で主流であるリベラル派フェミニスト・グループ NOW（全米女性組織）は女性の雇用増大と軍隊組織の改革の観点から軍隊への女性の参入を支持し、女性兵士の増加を後押しした。義子さんは「そもそも軍隊は戦争を目的にして作られた組織ではないか。そこで男並みに昇進を認められることは人を殺すことに貢献したということだ。こんなことがフェミニズムのゴールであってよいはずはない」（『基地と岩国市民』74 頁）と、NOW の路線に反対であり、米軍女性高官を講師に選んで岩国基地内の会場で学習会を行うような「やまぐち男女共同参画会議」の男女共同参画についての考えには米国の NOW の女性兵士擁護と重なり合う部分があるとして厳しく批判していた。このように日米主流派のフェミニズムを批判する反面、義子さんは岩国住民投票が成功する原動力となった女性たち、イラク戦争で息子を失い反戦運動の大きなうねりをつくりあげる役割を果たしたシンディ・シーハンさんをはじめ、平和を築く主体となった女性たちの存在に心を動かされ、励まされていた。彼女たちが体現したような、「自立した市民」の誕生と成長に女性解放と社会変革の希望を抱いておられたと思う。

理論的にはマルクス主義に出発してウィメンズ・リブと社会主義フェミニズムに出会い、アメリカで学んで女性学の再創造を唱え、岩国や米本国で闘う女性たちに心を寄せていた三宅義子さんだったが、私が直接何度もお会いするチャンスに恵まれた 2000 年代以降の時代状況をふりかえれば、ウィメンズ・リベレーション（女性解放）どころか「女性学」や、さらには「男女共同参画」まで危機に瀕するバックラッシュの時代であり、しかも「女性解放は社会主義になれば、必然的に達成されるという思想的雰囲気」は良くも悪くも消えており、社会主義といえば過去の遺物か全体主義の変種としか思われないような雰囲気が世間に支配的になり、それどころか人文系の学問や思想が大学業界内でさえ窒息させられてゆくような時代であった。だからこそ三宅義子さんの存在は溌剌とした爽やかな空気のように私の呼吸をラクにしてくれたのだと思う。その義子さんが他界されてしまい、この世の空気がますます重く、薄くなったように息苦しい。

（2007 年 12 月 1 日　錦帯橋の近くで開かれた岩国基地反対の集会に参加）

（2008 年 7 月 31 日 沖縄の「すぺーす・結」で高里鈴代さん、浦崎成子さんたちと交流」）